
ぶらっく しあたー

日高 マドカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぶらつく しあたー

【Nコード】

N2733G

【作者名】

日高 マドカ

【あらすじ】

小さな映画館であなたの日々を魅せて下さい。ここはあなたの映画館。アナタノタメダケニ

第1話 猫

傾いた建物

題名の消えた

映画のポスター

誇りの積もった床

そして、私は

古びた扉を開いた

そこには

綺麗な観覧席が
あった

「ココだけ綺麗…」

観覧席はもちろん
スクリーンまで
ピカピカだ

カッソ

靴音を鳴らして

男がスクリーンの前に現れる

「いらつしゃいませ

化け猫様」

男は執事のような黒いスーツを着て
黒い靴を履いていた。

茶色がかった髪は

短いくせに

前髪だけ異様に長い
肩につきそうだ

その前髪を

両サイドにわけて

整った顔をみせている

紅い瞳が

不気味で仕方がない

「あなたは？」

「ただの支配人です
お客様」

丁寧にお辞儀をした男は
スクリーンから退いた

「お客……？」

「ハイお客様です
どうぞ腰掛けて
ご覧下さい」

途端に部屋は暗くなり
スクリーンだけ
光りを浴びていた

男は当然のように
幕の裏に姿を消した

「ハア……？」

私がイスに座ると
映画が始まった

「君は変化が苦手なんだね」

「え？」

「尻尾が出てる」

「キャッ」

「猫に戻るうか。」

苦笑した彼に

頷いて路地裏に

逃げ込んだ

そして、

猫に戻る

すると彼も猫に戻った

「ごめんなさい先輩……」

「いや気にするな」

「化け猫ってバレたら
狩られるのに……」

時は

江戸時代。

妖怪狩りの盛る頃だった

2匹の化け猫が

人に化けるコトを覚えた。

人として生きる先輩に対して

私は

猫として生きた

「先輩、私

猫の姿でいいで…」

「黙れ」

ビクッ

先輩は

前だけ見てた

「役人だ

尻尾を隠せ」

妖怪探しだろう

バレたら

狩られる…！！

他の妖怪と違って

見た目でバレる

化け猫。

私は2つに割れた尻尾を
前に隠した。

ドクンドクン

ドクンドクンドクン

「待て」

ドクン！！

役人が

先輩を引き止める

「その猫を
見せろ」

先輩は

そつと振り返ると
ニヤリとして
跳んだ。

「失礼するぜ
幕府の犬共」

猫の姿に戻って
橋の下に姿を消す

「弥生！！」

「ハッハイ!!!」

私も逃げ込み
役人をまく

『どこだ!!!』

『まだ近くにいるハズだ!!!』

大通りをバタバタと
駆け回る役人を
遠くから眺める

『先輩…どうします?』

『そうだなあ…』

『人の姿になりましょうよ』

『姿が見られてるから…無理だな』

『…っ…』

『…でも、お前は
見られてない』

先輩は

そう言つて頭を撫でた

『え…』

『やるんだ』

『…ハイ』

力をねつて
空気を曲げて
私を人に…!!

『弥生。』

『ハイ…!』

『上手だ。』

一瞬だけ笑顔を見せて

『さあ逃げるんだ』

耳元で囁いた

『先輩は…?』

『俺は残る』

『そんな…!!』

『いたぞ！！！』

『っ！？』

口を抑えて
涙ぐむ

見つかった！
狩られる！！
死ぬ！！

カクカク震える足
死にたくない

『行くんだ』

『つやあ…』

『分からないか？
俺が自分を捨てて
お前を守る理由』

『っ…』

『愛してるんだ』

私は涙を堪えて
フルフルと
首を横にふった

『弥生が、
好きなんだ』

私は振り返って
涙を零した。

そして
走り出した。

そう

彼が

最後に残したのは

なによりも大切な言葉

『捕ましろ!!』

えっ？

『解!! 幻流!!』

『『『『うああああ』』』』

先輩は

猫に化けた時の私を幻覚で見せた

『すごい…』

私は安心して
背を向けようとした

大丈夫だ。

…って
思った

『ガッツツツ』

『、、、、』

夕陽が目に痛い。

赤に朱。

宙に浮いた先輩を
槍が貫く。

ドロリと
血が流れる。

残酷で
美しくて

…痛い。

『ゴフッ』

口から

血が垂れる。

その口元に

うつすら笑みがあつた。

『弥生が、

好きなんだ』

なんだか

その言葉を

思い出した。

頬を伝う涙が

落ちる前に

私は

江戸をぬけた

ジー

スクリーンは
真っ暗になつて
沈黙を続けた

「つくつーっ」

好きだったんです

だけど

先輩と死ぬ覚悟は
ありませんでした

「上映は終了です」

幕から

男が出て来た。

うつすらと

電気がつく。

「安心して下さい
お客様」

「？」

「この映画のフィルムは
あなたのものです」

どうぞ、と言って

フィルムを渡してきた

「…燃やしてちょうだい」

「…かしこまりました」

「あと…聞いてちょうだい」

「ハイ…？」

男は特に表情も浮かべず
とりあえず聞いていた

「私、好きだったのに
先輩のコト」

髪を解いて

「なのにダメだった
死ねなかった」

涙を溜めた。

「人間そんなモノですよ」
男は内ポケットから
シルバーのライターを
取り出した。

「人じゃないわよ？」

「これは失礼しました。
化け猫様」

シルバーのライターで
ボツとフィルムを
燃やす。

「…愛してるのよね。
今でも」

「…」

「もう行くわね」

「ハイ」

古びた扉に
手をかける
「お客様。」

「…？」

「美しい尻尾ですね」

「え？あー!!」

変化で隠しきれなかった尻尾に
やっと気付く

「ダメね。」

最初に分かったのはコレ？」

「ハイ。」

2マタの尻尾は化け猫様の証拠だと思ひまして」

「クスッ」

シュッ

尻尾を消した

「ありがとう」

「いえ」

「さよなら、

黒の支配人「ブラック オーナー」さん」

キィ

扉を閉める時

男は

綺麗にお辞儀していた

ガチャン

「ブラックオーナー…」

『ぴったリじゃねえか』

「そうですね」

『アレ？ 気に入ったのか』

「…さあ

今日はコレで終了ですよ」

小さな映画館。

いつか

あなたも

扉を開いて…

第2話 傘

カラン カラン

俺は

1本しかない足に履いた
ゲタを鳴らし、
建物を見渡した

俺の

傘から生えた足は
たった1本

傘の真ん中には
たった1つの目

今どき

流行もしない赤い傘だった。

「誰か、いねえのか？」

声は空しく響き

他の誰かの声は
返ってこなかった

「ムムツ」

きつちりと閉まった扉に

（あるハズのない）
眉間に皺を寄せた

「さすがにコレは
舌じゃ開けれんなー」

ドンドンッ

舌で叩くと
ギイと
扉が開いた

「ん。？」

「いらっしゃいませ」

中から
やたら整った顔の男が
出てきた。

「色、白つつつ」

思わず叫ぶと

男がニコツとした

「中に入ったら
どうです？」

多少

苛立つてるような声で
ハツとする

「怒ったのか！！？」

初対面で

アレは失礼だったか
と今さらながら

気付く

「入らないないなら
閉めますよ？」

相変わらず笑顔だ

アレ？

怒ってる訳じゃない？

俺は

開いた扉のすき間に
首だけいれて

覗いた

（正直

自分でも

首がどこにあるか
分からない)

「フオー
綺麗だな」

中には
綺麗な観覧席。

「閉めますよ？」

「やっぱり怒ってるのか!？」

この状態で
閉められたら
首も絞められる

「色、白いつて
素直に言ったから
怒ってるんだな!？」

「しめますね。」
「痛だただだ!!!」

「さあ
お掛けになって下さい」

男は

会話を

無理矢理打ち切って
指を鳴らした。

すると

照明が光を失って

スクリーンに

映像が

映された

『ハア』

嘆息をもらす

自分でも

嫌になる姿だ。

1つしかない目は

不気味でしかたないし。

1本しかない足は

何より不格好だった。

『どうしたの？』

『ひっ』

情けない声を出し
振り返ると
子供が立っていた

怖がるでもなく
じっとコツチを
みていた。

『お前…
恐くないのか？』

『べつに』

適当に切られた髪から
冷やかな瞳がのぞく

『…お前も
疎開するのか？』

『そうだよ』

いつの時代だったかなんて
覚えてない

とにかく戦争の盛る頃だった

『そうか…』

お前もこの地を
捨てるんだな…』

少年は、

俺を一瞥して

『命には代えられないから
と言った。』

全くその通りだと
俺も思う。

『でも、

お前の言ってるコトは違う』

少年は地面に座って
意味の分からない
マークを書く

『僕はココに帰ってくる』

『…本当か…？』

『本当だ』

『…』

『言ったからには守るよ』

『そうか』

『そしたら、

君にも会えるかい？』

『会える。

俺はこの地にいるから』

『じゃあ、

また会う日を待とう』

それだけ言つと

こちらを見るコトもなく

手を振つて少年は去つて行つた

『お前のコト

待つてて良いだかー？！！！』

そう叫ぶと

『ああ いいよ

また会おう。

約束だ』

静かに言葉が

帰ってきた。

あの日から

俺はお前を待っている。

空襲の時に鳴るハズのサイレンも

やがて

鳴らなくなった。

『痛っ』

空は真っ青。

焼け尽くされた地は
黒が広がるばかり。

『痛ででで

ってワチャー!?!!』

慌てて体を起こす

『燃えとるがなー!!!!ワチャチャ』

必死になって

傘に移った火を消す

『ハア』

火が消えた後に
素手を見つめる。

『あーあ』

素手で火を消したため
火傷がひどかった。

『…帰って…こないなあ』

少年が。

という意味ではない。

人が。

という意味だ。

それから

何年がたち

人々が戻ってきた

ただ

少年は帰ってこなかった。

『ハア

また溜め息がでるべやー…』

人々が帰ってきたは

いいものの。

今度は身を隠す生活だ。

『ねえ、』

『んあ！？！』

声に振り返るが
誰もいない。

『コツチ、』

『んん？』

遠くの方に
あの少年をみつける

『あつ！』

しかし、
少年は身をひるがえし
走り出す

『なっ！オイ！！』

傘を広げ
空を飛ぶ。

下から見れば
傘が飛ばされてるようにしか
見えないだろう。

『つたく
どこに行くんだか』

すると少年は

半壊の民家に
入っていった

フワッ

降りて中に入る。

ガタッ

隣の部屋から人影が現れ
俺は それが
誰かも確認せず

声をかけた。

『なんなんだよ
こんなトコに
連れて来て』

カシャーン

それは少年ではなく。

やせ細った女だった。

『キャー！！！！！！』
『キャー！！！！！！』

2人して
叫び。

その場に固まった

沈黙を破ったのは
女だった。

『あなた…』

俺は口だけパクパクしていた

『土足で上がってんじゃないわよー！！！！！』

スコーン

その瞬間

明らかに

金属製の物を投げられた

それに、

土足って

もっとツツコミ所あるじゃん。

俺、妖怪だよ？？

薄れゆく意識下

女の度胸と底意地に
恐怖を覚えた。

『あの一もしもーし』

『…』

『あ。起きた』

『…』

『いやー、すいませんでしたね。
ついね。アハハ』

ついで

あんだけやれれば
充分だ。

『えーっと、ハイ』

女は
茶封筒を渡して
ニコニコする

『…え?』

『コレを取りに来たんじゃないの?』

茶封筒の宛名には
俺の似顔絵

『俺…宛て?』

『そうよ。
ハイどうぞ』

それを

受け取って

『アイツは？』

聞いたら

優しい笑顔が返ってきた。

ジー

なぜか映像は
そこで途切れた。

「中途半端な終わりだべや」

「そうでしょうか」

「そうだべや」

「では、手紙を開いて
終わりにしましょう」

「…いや、
いいべや」

席を立つ。

そのまま
扉の前に立つ

「開けてくんろ」

「どちらをですか」

「両方じゃ」

「かしこまりました」

ぴりっ

ブラックオーナーは、
封筒を切り
手紙を出した。

「どうぞ」

「……」
手紙を開いて
読む。

次第に涙が
にじむ。

あの日約束した君へ

残念な知らせだ。

俺は

約束を破ろうと思う。

君は僕を

待っているだろう。

でも、

僕は帰らない。

手紙で

申し訳ないが

”さよなら”だ。

「嘔吐くの下手べや」

キィ

ブラックオーナーは
今度は扉を開いた。

「…帰るべや」

「ありがとうございました」

男は深々とお辞儀をした。

「ああ」

「失礼ですが、お客様」

「…」

「少々、疑問があるのですが聞いてよろしいでしょうか？」

「なんべや」

「なぜ

手を使われないのですか？」

「あんまり使うと
こうなるべや」

見せられた手の皮が
ボロリと崩れた

「コレは…」

「寿命だべや」

「失礼しました」

「いいや」

部屋を出ると

扉が音をたてて閉まった。

1度 振り返った時に

君の姿をみた気がした。

そうなんだ

さよならなんだ

戦争で亡くした

大切な人よ

ああ、

俺は君に

やっと会える。

ボラッ

体が崩れ

土になる。

形を残したのは
手紙だけ……

キィ

「やはりココで
逝きましたか」

『なんだ
分かってたのか』

「まあ これくらいは。」

『どうするよコレ。』

器「ウツワ」は、いらないんだぞ』

「片付ければいいでしょう」

『まあな』

「さあてと
後で地下に行かないと」

『なんだ？限界か？』

「ええ、お腹がすきました」

『じゃあ、後で
喰らえ』

「ええ」

辿り着けたなら
あなたの日々も
魅せて…

立つ。

そのまま
扉の前に立つ

「開けてくんろ」

「どちらをですか」

「両方じゃ」

「かしこまりました」

ぴりっ

ブラックオーナーは、
封筒を切り
手紙を出した。

「どうぞ」

「…」

手紙を開いて
読む。

次第に涙が
にじむ。

あの日約束した君へ

残念な知らせだ。

俺は

約束を破ろうと思う。

君は僕を

待っているだろう。

でも、

僕は帰らない。

手紙で

申し訳ないが

”さよなら”だ。

「嘔吐くの下手べや」

キィ

ブラックオーナーは

今度は扉を開いた。

「…帰るべや」

「ありがとうございます」

男は深々とお辞儀をした。

「ああ」

「失礼ですが、お客様」

「…」

「少々、疑問があるのですが
聞いてよろしいでしょうか？」

「なんべや」

「なぜ
手を使わないのですか？」

「あんまり使うと
こうなるべや」

見せられた手の皮が
ボロリと崩れた

「コレは…」

「寿命だべや」

「失礼しました」

「いいや」

部屋を出ると

扉が音をたてて閉まった。

1度 振り返った時に
君の姿をみた気がした。

そうなんだ
さよならなんだ

戦争で亡くした
大切な人よ

ああ、

俺は君に
やっと会える。

ボラッ

体が崩れ
土になる。

形を残したのは
手紙だけ…

キィ

「やはりココで
逝きましたか」

『なんだ
分かってたのか』

「まあ これくらいは。」

『どうするよコレ。
器「ウツワ」は、いらないんだぞ』

「片付けねばいいでしょう」

『まあな』

「さあてと
後で地下に行かないと」

『なんだ？限界か？』

「ええ、お腹がすきました」

『じゃあ、後で』

喰らえ』

「ええ」

辿り着けたなら
あなたの日々も
魅せて…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2733g/>

ぶらっく しあたー

2010年10月21日14時47分発行